

1 6世紀の文化と政治の関係 天下の統一と茶道の発展

ジョッリフ・ベネディクト

人間の歴史では、新思想が多くの場合、当時の政治権を持っている人々それぞれの目的を充実するために活用されている、とよくいわれる。世界の宗教を見ると、この傾向が明らかになる。キリスト教、イスラム教、仏教等を考えると三千年前にも、このことが何回もあったのは事実だと思う。現代の世界にも、もともとの哲学的な思想は次第に政治の世界には実用された。この中でわかりやすい例をあげると、やはりソ連のマルクス主義から共産主義までの発展が浮かんでくるだろう。日本にも、イデオロギーが勿論、大切な役割を果たした。徳川時代の思想は多分、最も印象的で、代表の社会にもその影響をまだ強く及ぼしているという意見が今日の学者の中では流行っている。けれども、16世紀の戦国時代の文化はそれほど影響を及ぼしていないので、以上で述べた傾向は、ちょっと離れた立場から見るとより明白になる。そして、このレポートで何を表したいかと言うと16世紀の文化的な代表である茶の湯と当時の天下統一運動との関係のである。一般的な文化発展の一例として見ると、正一反一合という文化のまたは社会の発展の形が見えてくると思う。

現代型茶の湯は16世紀の後半に初めて登場した。同世紀以前、複雑な作法はまだ存在していなかったが村田珠光という茶の湯の創始者が茶の湯の原型である三種類（いわゆる真一行一草別で分類した）を提案した。その頃の有力者は客を振り舞う際には書院座敷の部屋でお茶をたてて当時の芸術課題や政治問題などを相手と話し合うというのが典型であった。こうした娯楽や遊びはお金と時間が多くかかるという二つの理由で大体公家や貴族の人々に限られていた。とにかく、このような茶の湯はその客間の名から書院と称してきた。その特徴をあげると、まず詳しい茶礼は16世紀の初期には成立していなかったが、亭主又茶坊主が宗時代中国から伝えられた台子という食卓に似ている家具の上に釜、茶碗、茶入れなどの茶道具を置いてお茶を客にたてるという典型的な形はあった。次には当時の茶具のスタイルを少し考えておきたい。そういう人達に相応しい優れた陶器が使用されたのは確かなことであるがどんなスタイルの陶器であったかと言うと、最初は中国から伝えられた唐物であった。もっとも、そのものは国物よりも多彩で豪華な作品であった。例えば、肩衝、茄子の茶入れ、天目の茶碗というものが典型的である。けれどもこの頃には、唐物の特徴は茶碗以外のものに限られていた。例えば、唐物のスタイルは特に茶入れに現われていた。前述の茶入れは元々、薬入れとして日本に取り入れられた。これは書院風と

侘茶の湯との基本的な違いを明からかにする。室町時代の公家は他人にも外国人にもまとめられた芸術の美意識原則をそのまま、喜んで受け入れた。それに対して武野紹、千利休達にとって、自分の環境と関係ないものを芸術品にすることは不可能であり、それは彼らの芸術原則を無視することになるにちがいがなかつただろう。けれども、この美意識の変化（いわゆる唐物から倭物への発展）は前述のように茶の湯の創始者村田珠光の時に初めて見えてきた。当時の主流であった書院茶の湯のなかでも、そのあとの侘茶の湯の特徴は16世紀前半にもはじめて現われてきた。ただ珠光の場合にはこの発展が茶碗以外の茶道具に限られていた。最初に現われたのはもっぱら当時の茶入れ、花入れ、水指、建水などであった。しかしこのような小さな変化は中心的な有力者のなかにはしか見えてこなかった。16世紀の中期の政治体制は独立した地方大名で構成されたものであった。彼らはやはり自分達の領土や地位を固めようとしていた。このような場合には、有力者になったばかりの人々が先ず武力を確立してから高い文化的な地位を求めようと思うのは当然なことではないだろうか。その過程では作品、有名な芸術、豪華な家を作らせるのが最も多いかもしれない。それで京都の文化的な遊びや当時の流行っていた芸術が地方分権と共に普及することになった。従ってお茶を飲んだり、憧れた名物を収集したりすることはすぐ、当時の有力者がだれであるかということを示すことになった。とすると、侘茶の湯以前も、やはり茶の湯というのは成立した社会的な役割を持っていたといってもいいだろう。

当時の政治の展開と同じように16世紀の茶道の発展にも急激な変化が滅多に起こらなかった。織田信長はこの事実を具体的に表したというふうに見られる。信長は室町時代の有力な大名の息子として16世紀の二つの連続した時代を象徴した人物に見られるであろう。織田信秀は名古屋城主であって政治界にも文化界にも大切な役割を果たした。しかし、信秀が死んだ後、織田の領土は後継者争いでほとんど分裂されたが、1550年代後信長が自分の地位や領土を固めてしまった。足利家が以前お茶を飲むことを特権にした先例のように信長も当時の茶の湯を中心化刺激という政策（いわゆる茶の湯政策）として活用した。信長の統一化の政策の中では検地制度や刀狩りが最も有名のかも知れないが文化的な特権も使ったことがよく知られている。豊臣秀吉又徳川家康ほど使わなかったが、ある程度まで使用したことは次のように明らかになると思う。千宗室の「茶人伝」という本によると信長は刀と同じように名物を狩ろうと思った。なぜなれば前述のように自分の地位が上であるということの家来や相手の大名に表そうと思ったからであった。その結果、自分の名物をほめて当時の価値観を変えた。一つの例をあげると、茶の湯をようやく信長に許された秀吉は小踊りしてこれを喜んだと伝えられている。さらに、信長が1569年の正月に、最近完成した安土城での特別な茶会に自分の家来の11人を招いた。その中には息子の信正、秀吉、細川藤高などの当時の有力者も集まってきた。その日の茶記によって当日に使用された茶器はすべて名物でその前年、家来にもらったものばかりであった。それで、忠実な家来に感謝を述べるための象徴的な機会として信長は茶礼を適当な儀式として活用

した。

同世紀の60、70年代には信長の領土や権力が次第に増大していったのにつれて、安土城や茶具収集などのような権力の象徴が相互的に重要になったという文化発展の解釈もある。さて一般的に大名が集まる時に茶礼が大切な役割を果たしたと同じように、信長は忠実な家来に個人的な感謝を表現する時に茶入れ、掛け物、茶碗、釜などを具体的な賞として与えた。ある場合には、この名物がお金や領土よりもありがたがられた。例えば、かねてから「小茄子」の茶入れを希望していた滝川一益氏は茶入れを与えられずに上野国厩橋の城を預けられて関東管領に任ぜられたことを、かえって悲しんだとさえいわれている。こんな例はわずかに数例であったわけではない。当時の茶記にはこういう話が何百も載っている。その結果、それは当時の茶の湯の影響がどこまで及んだかを明らかに示している。秀吉の役割を考えると先ず彼が尾張の足軽の子から関白になったのを忘れてはいけない。その結果、こうした制度を信長よりも深く理解できたかも知れない。自分が成り上がろうと思った者であったので他の同じような性格をよくわかった可能性があるだろう。もっとも、信長の事実上の継承者として秀吉は信長の死後、彼の助言者をそのまま受け継いだ。今井宗久、津田宗及、千利休の三人の茶人は茶の湯に関連した事柄だけではなく、実際の経済、建築、外渉、貿易などの様々な当面の課題にすべてに助言していた。堺のすぐれた商人としてこの茶人は当時の事実に通じ、当面の問題の対策では大きな影響を及ぼした。茶の湯の世界でも特別な地位を持っていた。彼らの豊富な経験や茶器の収集以外には陶器に対して目が利くことはなによりも大切だった。なぜかというと茶の湯はほかの芸術よりも「もの」の文化の一つであるからである。茶会は普通客が茶室に入って抹茶を飲み当日使用された茶具を詳しく鑑賞し、相手と話し合うというものであった。その流行は特に茶の湯の成立過程において、尊敬された鑑定者の意見でいきなり変わってしまう可能性があった。千利休の侘茶の湯には日常的なものがすぐれた唐物よりももっと重視されたのでこの可能性が急速に大きくなった。そして、なによりも、当時の有力者は自分の所持物の価値を何回も確認しなければ、価値が減っていくおそれもあった。この鑑定の原則を決定する茶人は勿論権力者であった。さらに秀吉は茶の湯の遊びを彼の側近の間に広めたら効果的な方針になることに早く気が付いていた。

まず茶人は秀吉に対して忠実でないと自分の首を切ってしまう。それで茶具の鑑定の基準はこれらの茶人に決定された。彼らは自分自身で当時の基準を選択しなければならず茶具の決定に多大な影響を及ぼした。その結果、秀吉は実質的に何の価値もない陶器を集める趣味を贅沢だが高価のあるものにした。安土桃山時代の秩序を考えるとそのような傾向はかなり異質なものになるのではなからうか。さらに、茶具以外にも茶の湯の思想は指導的なイデオロギーに関してとても相応しいのであると思う。その思想は次の漢字で徹底的に表現されている：和、敬、清、寂。天下の統一を果たす者は新秩序を成立しようと思ったら新思想をその秩序のもとに認められなければならなかった。千利休が禅宗の原

(4)

則をもとにした侘茶の湯は当時の戦乱時代を治めるためにもっとも適当な観念ではなかったのだろうか。けれども、そういうふうにいえば、複雑な発展の原因を簡単にとらえてしまうおそれがある。多くの歴史的な前例のように、何が原因で何が結果かはっきり言うことはできない。と考えると、相互的な関係ができてきてAという結果は必ずしもBという原因からだけ生じたとはいえない。さて、利休の侘茶の禅宗に即した解脱や自己絶滅という根本的な思想は、そのような不安定な時代の事情から発生したといってもよい。なぜかという、自分の環境がいつでも壊れる可能性があれば、こうした急進的な概念はかなり信じられやすくなるものであろう。さらに利休によって提出された自分の周辺の日常そのものを活用するという実用主義の基礎も不安定な時にはその環境から当然生じて来る。事実か思想かどちらかが先にでてきたにしても、利休の成立した侘美意識が大名のなかに普及したのは当時の茶会記で明らかである。1537年から1543年までの百八十会では、利休風の茶碗が映した高麗物は五会しか使われなかったが、1557年—1572年の合計828会のうちでは235会に登場したということが伝えられている。秀吉の朝鮮半島の侵入後九州の薩摩大名が朝鮮の技術家を日本に連れて帰ってきた。そして、これらの陶芸家が九州で特別な窯を創業した。それは薩摩の大名が文化的な地位を向上する意図にほかならない。もっとも、戦争が新たな創造的な運動を刺激するのはとても皮肉なものといえよう。

とにかく、この数年では茶具の発展は元々の唐物（真一行一草の真）から朝鮮の影響で自然で荒っぽい高麗物（草）へ移って日本の国物（行）へ最終的に至った。村井康彦著「茶の文化史」によれば「真に対して先ず草が現われ、ついで両者を総合する形で行が出てくるのは、まさしく正一反一合という弁証法的な発展であったといえる」。私の意見ではその芸術的な概念は当時の歴史の発展にも当てはまる。室町時代の応仁の乱で弱くなった幕府は16世紀の国内戦争で一層破壊されてしまった。この元々の秩序がその「正」を象徴するなら、次の戦国時代は「反」となり、徳川の新たな幕府は両方の時代を総合する形で「合」として出てくるといえよう。

そうのように考えれば、もう一つの面白い文化的な発展の傾向が出てくる。この傾向は文化化と反文化化の二つのことに関して明白になる。文化の創造はやはり社会的な摩擦から生まれてくるのであろう。つまり、ある時の文化的な基準への挑戦は最初は全く反抗するように見えても結局その文化の秩序を維持してしまう。ある時にはその秩序を維持する発展も反抗する発展も相互的な関係で存在する。16世紀の茶の湯の発展にとってはこの対照が比較的目立っていたと思う。書院茶は侘茶ほど倫理的に深くないがそのスタイルには何よりも豪華な特徴が目立つ。さらに亭主と客人とのそれぞれの役割ははっきり分けられていない。客人はいつも自分の身分を気にしてまわりの客人に相応しく行動しななければならなかった。つまり、政権者の遊びとしての書院茶は当時の秩序をそのまま維持した。それに対して、利休の茶の湯の特徴を見ると、茶室の内訳、茶器、彼の詩や茶記に強調された

個人的な悟りが何よりも大切になるにちがいない。例えば、千宗室が「茶人伝」で述べたように「小座敷の茶の湯は第一仏法を以て修業得道すること也」では仏教の理想の方が社会の秩序よりも必要になると思う。もっとも仏教は歴史的にも哲学的にもどうしても社会を支えるものではない。利休があえてそんな観念に適当な茶、萩、瀬戸焼きなどを広めて新形式を創造したことはこの反文化が公認された文化に変わる傾向の代表であろう。もっとも利休の没後、茶の湯は書院茶にもっと近い形に再び戻った。利休の弟子の古田職部と小堀遠州達が徳川将軍の助言者になってから彼らの茶の湯はもっと伝統的な方向へ発展した。当時の比較的安定した状態の思想には前の時代の節約や実用を中心とした道徳は次第に薄くなってきていた。利休の茶の湯に忠実であった者は千道案しかいなかった。最後に、茶の湯の内包についてふれておきたい。仏教と同じように侘茶の中心には悟りの境地に達する目的がある。それを達成するためには、やはりこの世の中を解脱しないといけないのであろうか。もしそうであれば皮肉にも、その解脱の方法としての茶の湯には茶具を身につける風潮があって、その道具が逆にこの世の中の束縛に変わることになる。

参考文献

鈴木 勤 (1967) 『安土・桃山』 日本歴史シリーズ 10 世界文化社 東京

村井 康彦 (1979) 『茶の文化史』 岩波新書 東京

(1971) 『千 利休』 日本放送出版協会 東京

井口 海仙 (1982) 『茶人伝』 淡交社 東京